

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：23401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720217

研究課題名(和文) 意味変化における語彙的観点と構文的観点

研究課題名(英文) Lexical and constructional perspectives for semantic change

研究代表者

森 英樹 (Mori, Hideki)

福井県立大学・学術教養センター・講師

研究者番号：20534671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、意味変化を分析する際に語彙的視点と構文的視点という2つの視点を想定することによって、同一構文の意味変化であっても、視点の違いによって文法化と見なせたり語彙化と見なせたりすることを示した。日本語と英語等の他言語における命令形表現を中心に、共時的・通時的データを収集・分析し、ケーススタディとして国内外での学会発表や論文を通して本分析の妥当性を検証した。本研究の成果は、今後、構文の概念を重視する認知言語学、構文化を扱う最新の意味変化理論といった関連分野における研究として発展させることができる。

研究成果の概要(英文)：The main claims of this research are that lexical and constructional perspectives are essential for the study of semantic change and that the same expression can be regarded as an example of grammaticalization or lexicalization, depending on its perspective for analysis. With these dual perspectives in mind, I have attempted several synchronic and diachronic analyses of imperative expressions from Japanese and some other languages, including English. These surveys were publicized in forms of presentations at conferences and through journal articles. The findings of this research can make theoretical contributions to related research fields, such as cognitive linguistics, which emphasizes the importance of constructions, and the latest grammaticalization/lexicalization theory concerning constructionalization.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：意味変化 文法化 命令文 条件命令文 副動詞構文

1. 研究開始当初の背景

(1) 意味変化の理論の発達と認知言語学における構文観の発達により、両者を統合的に扱えるような理論的視座が求められる。そこで、意味変化のプロセスにおける構文の役割を考察し、意味変化理論のなかで構文という概念がどのように理論的に位置づけられるかを探る。特に、認知言語学における構文観を援用することによって、共時的視点と通時的視点がどの程度まで理論的に融合できるのかを探る意義がある。

(2) 認知言語学はこれまで共時的な言語分析が中心であったので、意味変化を扱う際には、理論的な整備が必要である。具体的には、認知言語学的な構文観と意味変化理論との理論的融合性がいかなるものが確認する必要がある。認知言語学で定義づけられる構文とは、意味と形式のペアのことであって、語彙の一定の連なりとしての伝統的な概念とは区別される。認知言語学における構文観では、当該表現のスロットの数によって、語彙的に指定されたものから SV00 のようにスロットのみのもので抽象度は連続的である。かつ、構成要素の数の違いによって、いわゆる単一の単語から複数の語彙からなる表現まで様々である。このように言語を動的な構文ネットワークと捉えることで、意味変化の動的なプロセスとの接点を見出す素地ができる。

(3) 意味変化理論のなかで構文的観点の重要性が強調され、Trousdale (2008) の研究では、抽象度の高いスキーマとしての構文が考察の対象となることが多く、スキーマそのものが変化対象として捉えられる。しかし、抽象度の低い、具体的な語彙項目が変化後の意味に意味的・語用論的制約を与えることが知られており、意味変化のなかでの特定の語彙項目の役割を無視することはできない。従って、構文観を意味変化理論のなかに取り入れる際には、より抽象的な構文的視点とより具体的な語彙的視点が必要であり、この複眼的視点を理論的に整備する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 意味変化理論に語彙的視点と構文的視点の複眼的視点を導入し、よりきめ細かな分析を可能とする。具体的には、当該言語(意味)変化を分析する際の研究的視点として、語彙項目に着目する語彙的視点と、よりスキーマ的な構文に着目する構文的視点を想定する。これによって、同じ言語事象であっても視点の違いで、文法化として見なされたり、語彙化として見なされたりするケースが出てくることを明らかにする。まとめると次の表1ようになる。2つの視点(語彙的視点・構文的視点)と2つの変化(文法化・語彙化)の組み合わせによって、少なくとも4つの事例に分類できることを示す。

表1: 視点の違いと変化の違い

	事例1	事例2	事例3	事例4
語彙的視点	文法化	語彙化	語彙化	文法化
構文的視点	文法化	語彙化	文法化	語彙化

(2) 表1の分類に沿って、それぞれの事例に相当するような意味変化のケーススタディを行う。特に、分析の際の視点の違いによって意味変化の性質が異なる事例3や事例4を取り上げ、2つの視点の必要性を実証するとともに、意味変化に内在しうる多面的な側面の理解を深める。

(3) 表1のケーススタディとして、応募者がこれまで研究してきた日本語と英語の命令形表現を中心に分析する。なかでも、日本語の「Vてみる」条件命令文は、文法化の例として扱われることが多いが、研究者によって、文法化理論における一方方向性仮説に関しては、仮説の反例であるとするものと支持例とする見解がある。この種の結論の違いが、分析の視点の違いに由来することを示す。

(4) ケーススタディを通して、言語間の異同を明確にするとともに、他言語へも分析対象を拡げることによって、意味変化の類型を見出す。具体的には、意味変化に関して、語彙的観点と構文的観点を両極としたスケールの理解をすることで、語彙の変化が優勢な事象と、構文の変化が優勢な事象が明らかとなる。これに関連して、語彙の変化が優勢な言語、構文の変化が優勢な言語というように、意味変化における言語的類型を通言語的に明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 辞書類、データベース、コーパス等の言語資料を参考にして、分析対象となる事例の共時的・通時的データを収集・整理した。具体的に活用したのは、日本語では『日本国語大辞典』、国文学研究資料館データベース、青空文庫、英語のデータ収集には、ICAME、The Oxford English Dictionary、The Corpus of Contemporary American English (COCA)、The Corpus of Historical American English (COHA)、Project Gutenberg 等を積極的に利用した。

(2) 辞書やデータベースによるデータ収集を補う作業として、研究協力者に対してメールによる聞き取り調査を試みた。回答として、インドネシア語の視覚動詞 *lihat* と、中国語の視覚動詞「看」の用法に関して、情報提供を依頼した結果、日本語「見る」と比較対照した場合、日本語では「Vてみる」の形式で条件の意味を表せるが、この用法は、インドネシア語、中国語にはなく、インドネシア語

では「てみる」のような補助動詞用法もないことが分かった。このような視覚動詞における意味変化の進度が言語間で異なるという事実を調査できた。

(3) 表1の分類に基づくケーススタディができるよう日本語と英語の関連事象を体系的に整理し、順次、学会発表や論文として公表することに努めた。

4. 研究成果

(1) 日本語と他言語との意味変化の異同を明確にしなが、表1の分類に沿って、事例研究の充実化を図ることができた。本研究と特に関連が深いものは以下の通りである。

文法化と語彙化の観点から、英語と日本語の発話動詞を使った命令形定型表現 *Talk about X* と「うそつけ」の歴史的発達について考察し、各表現の特徴を比較対照しながら、前者は文法化、後者は語彙化の例であることを論じた。〔5. 学会発表〕

語彙的視点と構文的視点を念頭に置きながら、日本語の条件命令文「V てみる」構文に関する2つの先行研究をメタ的に扱って、同一の構文であっても分析の視点が異なれば、文法化における一方向性仮説に反する場合とそうでない場合とに結論が分かれることを考察した。〔5. 学会発表〕

この2つの視点が、「X そのけ」「なこそ(の関)」「X に持ってこい」「言わば」等の日本語表現、植物名としての *forget-me-not* や *touch-me-not* 等、各種慣用表現の発達を論じる際にも有効に働くかどうかを検証した。そして、上の日本語表現は、それぞれ順に表1内の事例1、事例2、事例3、事例4として分析でき、また、英語植物名は事例4として体系的に分類・整理できた。〔公表に向け準備中〕

(2) 命令文研究、意味変化研究、モダリティ研究と理論的な整合性を持たせることによって、派生的に関連表現についての考察を深めることができ、かつ本研究と関連領域との接続を見出せた。これによって、本研究を、命令文、意味変化、モダリティといったより大きな研究領域のなかに位置づけることができた。具体的には、次のような派生的成果が得られた。

本研究の焦点は、意味変化の仕組みの解明にあるが、扱うデータに命令形表現が多かったため(上記(1)参照) 様々な言語における命令文のデータを収集していく過程で、そして、命令文の研究書の書評を準備・執筆するなかで、命令文の意味的側面に関して知見を得ることができた。具体的には、命令文の命題的内容を「現実・非現実」の反転現象と

して捉えたときに、*mirativity* という言語類型論等で用いられる概念が有効であるというものである。〔5. 雑誌論文、学会発表〕

日本語の否定命令文の歴史的変遷に関する研究として、かつては「な V そ」(上記(1)で扱った「なこそ」がその一例)と「V な」という2つの否定命令表現が併存していたが、時代と共に後者に一元化されていく過程を、日本語の文末決定性や「な」の遊離性の観点から記述した。この日本語の変遷は、英語等の他言語の否定表現の変遷と同様であることが分かり、日本語否定命令文の変化は一般的傾向に沿っていることが明らかとなった。〔5. 雑誌論文〕

事例1の文法化の具体例として、日本語の「V てみる」の表現を取り上げたが、この「V てみる」条件命令文に関して、さらにモダリティと再分析構造の観点から考察を深め、共時的・通時的な分析を試みた。その結果、当該構文が後件とともに副動詞構文として文法化したものであるという、より具体的な分析の可能性を示せた。この考え方によって、再分析構造こそ、他にはない条件解釈の基盤であり、この構造が他の類似表現との違いを生みだしていることを明らかにし、「V てみる」条件命令文の特異性とともに類似表現とその差異を理論的に説明した。〔5. 雑誌論文〕

(3) 本研究期間内に十分な調査や分析ができなかったこと、今後の発展的研究として、最新の意味変化理論における本研究の位置づけの明確化と他言語におけるデータ収集と分析が挙げられる。

本研究と最も関連の深いと思われる意味変化研究の集大成 *Constructionalization and Constructional Change* (E.C. Traugott氏と G. Trousdale 氏の共著) は2013年に公刊された。本書を本研究期間の後半期になって入手したため、語彙的視点と構文的視点の複眼的視点による本研究で提示した考え方を、「構文化」というこの最新理論のなかにもどのように組み込んでいくべきか、あるいは全く整合性が見込めない外的なものなのか、ケーススタディを踏まえながら、早急に検討していくべきであると考えた。

先行研究、文献調査、聞き取り調査等を通して、日本語と英語以外のデータを収集したが、量質ともに日英語ほどの収集、整理ができていない。そこで、今後は韓国朝鮮語、中国語を中心に視覚動詞の用例を収集して日本語と比較対照する。これまでの調査で判明していることは、次の表2から表5のようにまとめられる。

表2：日韓中の視覚動詞（本動詞）の形式

本動詞の形式	見る	poda	看
	見える	poida	看見
	見せる	poida	給~看

表3：日韓中の視覚動詞（補助動詞）の形式

補助動詞の形式	てみる	poda	看
	てみえる		
	てみせる		一定要

表4：本動詞用法の意味

『明鏡国語辞典』	『韓国語辞典』	『中日辞典』
見る	見る	見る
内容をつかむ	済ませる	黙読する
鑑賞する	留守番する	見て判断する
感覚によって知る	受ける	訪問する
占う	得る	診察する、診察を受ける
診察する	損得を被る	思う
世話する	膳の支度をする	によって決まる
状況や反応をうかがう	用を足す	気をつける（命令形）
判断する	占う	世話する
体験する、遭う		対処する
成立する		注意喚起
時間的ゆとりを計算に入れる		
視点>比較（仮定形）		

表5：「てみる」相当の補助動詞用法の意味

試す	試す	試す(重ね型、量詞、期間)
条件(命令形の場合)	ようだ	視点(非意志述語は不可)
視点(非意志述語も使用可)	より(助詞)	
	より(副詞)	

これらのデータに基づき、各言語の意味拡張の異同を記述・説明していく。

上記の対照研究、そして「V てみる」の副動詞構文分析を進展させる形で、動詞連結構造の共時的・通時的データの整理と分析を行う。日本語では、「立って食べる」の「VてV」、「食べ歩く」の「W」タイプがある。本研究で重点的に扱った「V てみる」は前者に属し、「Vてくれる」等、他の「VてV」構文との理論的関連性を明確にしていく。なお、「(Vて)くれる」に関しては、研究期間内に、授与動詞「くれる」の特異性に着目しつつ、依頼表現「Vてくれ」の文法化の過程を探っ

た。その際、日本文化特有の「恩」の概念を考慮して、文法化研究における社会文化的要因の必要性を論じたので、これらの新たな視点も加味しながら本研究を進展させていきたい。〔5.学会発表〕

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

森英樹 (2014) 「「V てみる」条件命令文のモダリティと再分析構造」『言語研究』145, 1-26. (査読有)

Mori, Hideki (2013) "A Cognitive Linguistic Analysis of the English Imperative: With Special Reference to Japanese Imperatives by Hidemitsu Takahashi," *English Linguistics* 30, 752-764. (査読有)

森英樹 (2013) 「日本語否定命令文の歴史の変遷」『福井県立大学論集』40, 1-14. (査読有)

〔学会発表〕(計4件)

Mori, Hideki (2014) "A Socio-cultural Analysis of the Japanese 'Give' Verbs into a Request Marker," Socio-cultural Factors in Style. (Eotvos Lorand University, Budapest, Hungary) 2014/2/6

Mori, Hideki (2011) "Mirativity in Imperatives," Australian Linguistics Society 2011 Conference. (Australian National University, Canberra, Australia) 2011/12/3

Mori, Hideki (2011) "Constructions vs. Lexical Items: The Grammaticalization of V-te-miro Conditional Imperatives," The 21st Japanese/Korean Linguistics Conference. (Seoul National University, Seoul, South Korea) 2011/10/22

Mori, Hideki (2011) "Grammaticalization and Lexicalization of A Verb of Speech in English and Japanese," Cognitive Perspectives on Contrastive Grammar. (University of Economics and Humanities, Bielsko-Biala, Poland) 2011/9/27

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 英樹 (MORI, Hideki)

福井県立大学・学術教養センター・講師

研究者番号：20534671